

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、一部省略した箇所がある。）

日本の国内でも外国の場合でも、初めての場所や名所旧跡を訪れると、必ず絵葉書を買って求めるところが癖になった。記念の意味もむろんあるが、それだけではない。一枚の絵葉書は同時にまた、さまざまな情報を伝えてくれる貴重な資料でもある。

I、西も東もわからない初めての町に着いたとき、町角の土産物店に並べられている絵葉書を見れば、町の主要な観光スポットはおおよそ見当がつく。絵葉書になっているのは、だいたいよく目立つ建物などだから、実際に町を歩くときの目印としても憶えやすい。また教会堂のように巨大な建造物になると、上層部の細かい装飾などはよく見えないが、絵葉書になるとよくわかる。パリのノートル・ダム大聖堂の正面部回廊を飾る有名な怪物の姿は、下から見上げてもはっきりと見分けることはできないが、近くの土産物の店を覗くと、そのどこか愛嬌のある顔がいくつも並んでいる。絵葉書の威力といってもよいであろう。

つい最近も、北イタリアのパヴィアを訪れたとき、同じような経験をした。パヴィアはミラノから車で一時間ほどのところにある人口七万ほどの小さな町だが、中世以来の由緒ある歴史の思い出を、多くの教会堂や領主の城館に今も残している。なかでも特筆すべきは、町の中心部から少し離れた郊外の地に聳え立つ<sup>※</sup>カルトジ才会修道院教会で、その正面部いっばいに展開される植物模様、人物像、物語表現などの彫刻装飾の華麗さは、他に類例を見ない。ケツサクとして、美術史上でも名高いものである。私が訪れたときは、ちょうど建物の南半分が修復のために覆われてしまっていたが、残りの部分だけでもその素晴らしい表現は見る者を驚嘆させるに充分であった。堂内にも、壁画、浮彫り、祭壇などが豊かにちりばめられていたが、私を含めて観光客を特に喜ばせたのは、<sup>※</sup>身廊部奥の壁の上部に、窓から身を乗り出して下のほうを眺めている修道士の姿を描き出していることである。つまり一種の騙し絵だが、そこには造営に携わった職人たちの遊び心もうかがわれて、きわめて興味深い。ただ、何分にもきわめて高い壁に描かれているので、それだけに効果的ではあっても細部がよく観察できないもどかしさは抑えきれないものがあつた。ところが教会内の売店には、その部分だけをクローズアップした絵葉書も、また正面部を完全なかたちで写し出したものも並べてあつたので、さつそく買い求めた次第である。

このように機会あるたびに絵葉書を集めて眺めていると、その表現にある共通した特色が認められることに気づく。それは、このパヴィアの教会堂であれ、あるいはローマのコロセウムやパリの凱旋門であれ、西欧の名所絵葉書は、いずれも余計なものではできるだけ切り捨てて、対象そのものを

正面から画面いっぱい捉えるというやり方を採っていることである。絵葉書が観光名所の紹介を目的とするものである以上、そんなことは当たり前だと言われるかもしれないが、ことはそれほど簡単な話ではない。B日本の観光絵葉書では、お寺でもお城でも、建物だけを捉えたものは稀だからである。

事実、例えば京都の観光絵葉書を見ると、建物も庭も白一色に覆われた「雪の金閣寺」とか、咲き誇る桜の花を前面に配した「清水寺の春」などのように、周囲の自然と一体になった建造物をモチーフとしたものが圧倒的に多い。そこでは、西欧の絵葉書では排除されている自然が大きな役割を演じているのである。

そのことは、名所についての日本人の考え方、さらには自然観と密接に結びついているであろう。もともと日本人にとって名所とは、高雄の紅葉とか醍醐の桜というように、自然景と一体になったものであった。写真の登場以前に今日の絵葉書と同じような役割を果していた浮世絵の名所を思い出してみれば、その間の事情は明らかである。

代表的な例としては、※広重の晩年の名作《名所江戸百景》がある。これは文字通り江戸の名所を次々に版行して、全部で広重は百十八点の「名所」を残した。それを、広重の死後、版元が新たに一点と扉絵を追加して、総計百二十点の揃物として売り出したのだが、その際、当初はばらばらに制作されていたものを、春夏秋冬の季節に分類して纏めたのである。それは広重の作品が、雪晴れの日本橋とか、花の飛鳥山といった具合に、いずれも季節と結びついていたからである。自然の姿ばかりでなく、五月の鯉のぼりや七夕祭り、あるいは両国の花火のような年中行事も登場して来るが、これも自然の運行と同調するものである。つまり「名所」は、単に空間的な場所であるだけでなく、時間、それもAと一つになった場所なのである。

だが西欧の凱旋門や教会堂のようなモニュメントは自然の変化や時間の経過を越えて永続するものを目指してつくられた。もともと「モニュメント」という言葉が、ラテン語の「思い出させる」という動詞に由来するものであることから明らかのように、何ごとかを記念してその思い出を長く後世に伝えるためのものである。それは記憶の継承のための装置と言ってもよい。II 思い出は当事者がいなくなれば、時の経過とともに次第に忘れ去られる。そのような忘却に対抗するために、容易に失われることのない堅牢な石の建造物を造ったのである。

もちろん、日本人も思い出を大切にしている。だが日本人は昔から、記憶の継承を物質的な堅牢性に頼るのではなく、自然の運行のなかにその(イ)ホシヨウを見出した。c 自然は人間と対立するものではなく、むしろ人間にとって信頼する存在なのである。

そのことは、都市作りのあり方にも表われている。凱旋門や戦勝柱、大聖堂のような西欧のモニュメントは、町のなかの目印、すなわちランドマークとしての機能も果すものである。これらの建造

物がしばしば巨大なスケールを指すのは、そのためである。だが日本においては、都市のランドマークとなるのは、京都なら東山、奈良なら生駒連山というように、ここでもやはり自然である。江戸の場合も事情は同様で《名所江戸百景》のなかに独立した建造物が目立つように描かれている例は一つもない。その代り、人々の眼を惹きつけるランドマークとして繰り返し登場して来るのは、富士山と筑波山である。(ゆ)カブキ十八番の『鞆当て』のなかのせりふに、「西に富士ヶ根、北には筑波」とあるように、江戸の人々は明け暮れこの山の姿を身近に感じて生活していた。そればかりでなく、広重の《百景》のなかの「する賀てふ(駿河町)」の図に見られるように、西欧的遠近法にしたがって手前から奥へずつとのびる町並みの上に、大きな笠のように姿を見せる富士すら描かれている。それは、町並みの向うにたまたま富士が見えたというのではなく、富士の見える方向に町がつくられたからである。つまり富士山は、それほどまで江戸の人々にとって B だったのである。

このような浮世絵も含めて、観光名所絵葉書は、東と西の自然観、そして美意識の違いをよく物語っていると言つてよいであろう。

(高階秀爾「日本人にとって美しさとは何か」より)

(注) ※1 カルトジオ会修道院Ⅱフランスで創設されたカトリック教会の修道会。

※2 身廊部Ⅱキリスト教建築で、入口から主祭壇に向かう中央通路の一部。

※3 広重Ⅱ歌川広重。江戸時代の浮世絵師。

問1 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナと同じ漢字を使うものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は  ～ 。

- (ア) ケツ|サク  ① ケツ|点が一つも見当たらない。  
② 才能がケツ|出した人物。  
③ 青かった顔にケツ|色が戻ってくる。  
④ 誇り高くケツ|癖な性格だ。

- (イ) ホシ|ヨウ  ① 無美をシ|ヨウ|明する。  
② シ|ヨウ|降口を掃除する。  
③ シ|ヨウ|害物を取り除く。  
④ 事故の賠シ|ヨウ|金を払う。

- (ウ) カ|ブ|キ  ① ブ|芸の稽古を続ける。  
② ブ|器用で、細かい作業は苦手だ。  
③ 逆境にある味方を鼓|ブ|する。  
④ ブ|辱に対し、徹底的に抗議する。

問2 文中の空欄 I・II に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は 。

- ① I || したがって II || また  
② I || あるいは II || しかし  
③ I || まず II || つまり  
④ I || 例えば II || だが

問3 傍線部A「同じような経験」とはどのような経験か。その説明として最も適当なものを、次の

①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は 。

- ① 絵葉書によって、街の主要な観光スポットの見当がつけられたという経験。
- ② 実際はよく見えない装飾の細部を、絵葉書によって確認できたという経験。
- ③ 建物が改修中であっても、見たかったものを絵葉書で見られたという経験。
- ④ 絵葉書によって、造営に携わった職人たちの遊び心に気づけたという経験。

問4 傍線部B「日本の観光絵葉書では、お寺でもお城でも、建物だけを捉えたものは稀」とあるが、

その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答番号は 。

- ① 日本人は伝統的に、建造物よりも年中行事に価値を見出してきたため。
- ② 日本の寺や城は外見が地味で、自然景と一緒にないと魅力が乏しいため。
- ③ 日本では、自然の運行と一体になったものが名所だと考えられてきたため。
- ④ 日本人は、永遠に存在し続ける建造物はないという事実を認めていたため。

問5 文中の空欄A に入る言葉として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

解答番号は 。

- ① 循環する時間
- ② 永遠なる時間
- ③ 凍結した時間
- ④ 無機質な時間

問6 傍線部C「自然は人間と対立するものではなく、むしろ人間にとって信頼する存在なのである」

とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

解答番号は 。

- ① 日本人は思い出を建造物やモニュメントではなく、自然の運行に託しているということ。
- ② 日本の穏やかな自然は人間を害することがないため、日本人に愛されているということ。
- ③ 人間と違って自然はけっして人間を裏切らない、というのが日本人の信念であるということ。
- ④ 記憶の継承には自然の運行が必要だと考えるのが日本人だが、欧米人はその逆だということ。

問7

空欄

に入る言葉として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解答

番号は 。

- ① 見慣れた存在
- ② 守るべき存在
- ③ 畏れ多い存在
- ④ 親しみ深い存在

問8

本文の内容に合致するものとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。解

答番号は 。

- ① 本物の彫刻装飾が持つ植物模様、人物像、物語表現などの魅力は、絵葉書では十分に伝わらないので、現物に触れることが求められる。
- ② 西欧の絵葉書では自然が排除されている場合が多いが、それは自然を人間と対立するものとみなしているからである。
- ③ 西欧で堅牢な石の建造物を造るのは、忘却に対抗し、思い出を長く後世に伝えることを目的としているからである。
- ④ 人工のモニユメントの永続性を信じていない日本人は、自然のランドマークとして富士山や筑波山を採用した。